平成２８年３月３日（木）

老球の細道２１７

魅惑の指導者業

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

元日本プロ野球界のスーパースター清原和博選手が覚醒剤取り締まり法違反容疑で警察に逮捕された。高校時代からプロまで何でも自分の思い通りに行って、野球界の頂点を極めた清原選手がなぜ？これから原因などが詳しく解明されるのだろうが、おおかたのマスコミによると、スーパースターであり続けるプレッシャーに勝てなかったのでは・・と。

逮捕された時に語った一言の中に「野球をやっていなければこんなにならなかった」というコメントがあった。野球によって得られた自分に対する名声が道を誤らせたということなのだろうか。２０年前には警察の薬物キャンペーンポスターに「覚せい剤を打たないでホームランを打とう」というメッセージを語っていたのに。

この時、清原選手を育てたＰＬ学園時代の恩師中村監督（現名古屋商科大学監督）はどのような心境でわが教え子の逮捕の姿を眺めていたのだろうか。しかも、甲子園優勝という頂点を極めた教え子の「野球をやっていなければ・・・・」のコメントを聞いて。

清原選手の逮捕がテレビで騒がれていた時に、ＮＨＫテレビのドキュメンタリー番組で、私が原町高校時代にクラス担任をした生徒が出演していた。彼も高校野球に青春をかけた生徒だった。今は地元原町で写真館を営んでいる。東日本大震災で被害を受けた人たちのために写真を通して励まし続ける活動が放映されていた。あの番組を見ていて当時の野球部の監督Ｎ先生はどんなに誇らしげに思ったことだろう。

先日須賀川アリーナであったｂｊリーグ福島ファイヤーボンズ対信州ブレイブウオーリヤーズの試合を観戦した。坂下高校時代の教え子上杉君が出場した。出場時間も短く、仕事もボンズのエース・ナッシュ選手を抑えるという地味な役割だったが、腐らずに一生懸命にプレイしていた。ベンチにいても常にチームメートを励ますことを忘れずに頑張っていた。高校時代の姿勢と変わらない姿に安心して帰ってきた。教え子たちが自分の手を離れて次なるカテゴリーに進んでも、高校時代と変わらない姿勢で、さらにたくましくなっている姿を垣間見ることは、指導者にとって至福のひとときでもある。

【「この仕事は麻薬のようなものだよ」。かつて、サッカー日本代表監督だった岡田武史さんにこう話したのはイングランドの名門アーセナルを率いるベンゲル監督だった。のしかかる重圧と、その先にある甘美な達成感。こんなに割にあわない仕事はないとこぼす岡田さんに、ベンゲル監督は未来を予言するように、一度やれば病みつきになるのが監督だと語りかけたという】（朝日新聞コラムより）

指導者（コーチ）は麻薬をやってはだめだが、指導者にとって麻薬のような報酬とは何か。私は「三つの喜び」だと思う。お金や役職、地位などではない。一つは、自分自身の能力を高める喜びである。自分自身の指導力によって選手たちが一生懸命練習し、どんどん上達する。もう一つは、指導者自身の人間的な成長。日々、選手や保護者などとの葛藤を通しながら自分自身が成長する。そして最後に、仕事を残す喜びである。理想のチームを創り、理想の選手を育てる。将来、その教え子たちから「人生の大切なことは、すべてバスケットボールから学ぶことができた」の一言を聞くこと。

アマチュアの指導者は飯は食えないが夢は食える。だから人生をボールに振れる。